

新刊
紹介

河崎洋子著

『変貌の季節を』

(海声社・発行一九八八年三月
A5判・二三八頁 一、五〇〇円)

時には本を後うから読むということがある。逆に読むというわけではない。「後書き」や「解説」を読むことによって、より正確に本文の内容を理解出来るということである。本書を読む方に私はこの読み方を提案したい。六章にわたる著者河崎洋子牧師(大学宗教主事)の記録に続き、高道基教授(新島学園女子短期大学学長)の「河崎洋子論への試み」が記載されている。高道教授は本学神学部教授を務めたこともある方であり、彼の文才は広く知られているが、

For some in ancient books delight;
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth
Not to be thought expert in both.

この八ページの短文は河崎洋子氏を見事にとらえ、かつ深い敬愛の念を込めて書かれている。これが本書の導入としてふさわしい。

河崎洋子という人物はすんなりと理解出来る人間とは言い難い。古くから知っており交友関係にあって、ある日突然彼女の隠されていた側面を見出して驚いたり、自分が持っていたイメージが変わったり、変らざるを得なかったりして当惑するのである。けっして否定的な意味ではない。人間的に豊かに広がっていく人の発見のプロセスである。

本書の出版に至る流れも彼女の人物を示している。「文章の人であるよりは、むしろ実践の人であり、対話の人」である。河崎洋子の青年時代からの仲間が友情と尊敬の念から、彼女が語り、書き綴ったものをまとめたかと思ひ始めたのは何年も前の事であったようだ。彼女の反対と躊躇を押し切り、集めた資料を絞りに絞って二百ページ余りのものにまとめあげた。この経緯が嬉しい。編集にあたった人々は当然の事ながら、ささやかな出版記念のパーティーに

集った人々の喜びと祝福の顔を見た時、そしてその多様な顔ぶれ、年齢、背景を知った時、河崎洋子という人の不思議さを新たに思ったのであった。

本書は時代の流れをあらさまに反映している。そしてその歴史はどの部分をとってもバラ色ではない。少なくともその歴史に生きる著者にとって必ずそこには危機が潜んでいるのである。それは編集者の言葉にあるように、「抗議する精神」こそ河崎洋子の本質であるからなのかもしれない。すなわち「人間の尊厳を冒瀆するものには、人間としての誇りをもって抗議する精神」に生きている人の言葉、ものの見方、アビール、歴史観等が時には味わい深く、時には激しく、そして時にはやさしく読者に伝わってくるのである。そこに示される危機感には必ずそれを突破しようとする姿勢が見えてくるのは、人が何と言おうとも信仰によって生きようとする著者の生命そのものがあるからであらう。河崎洋子の同僚者として私は感慨深くこれを読み、またこれが広く読まれる事を望むのである。

深田未来生(大学神学部教授)

『天皇の代替わりとわたしたち』

(日本基督教団出版局・一九八八年四月
B6判・二〇四頁・一、七〇〇円)

昨年の九月、天皇の緊急入院・手術という事態に直面し、Xデー、つまり天皇の代替わりがにわか現実に帯びてきた。だが、天皇の代替わりにはなにがおこるのか。一九二六年十二月二十五日午前二時四〇分、宮内省は大正天皇の「崩御」を発表した。それからすでに六十余年、大正から昭和への代替わりを体験的に語れる人は限られている。特にこの間、戦争と敗戦を経て、日本の法体制は憲法をはじめとして大きく変っている。日本人の大多数は、一連の過去の皇位継承儀礼と戦後憲法下でそれがどうなるのか、ほとんど分っていない。本書はこうした課題に応える時機にかなった著書である。

しかし一方では、支配層によるXデーの準備は着々と進められてきた。一九七九年六月には「元号法」を成立させ、新天皇の践祚(即位)・改元をこなしている。一九八二年中曽根前政権は、「戦後政治の総決算」

路線を唱えて登場し、侵略戦争への厳しい反省の上に築くべき戦後をないがしろにし、天皇制やそれと一体となった日の丸・君が代、靖国神社、伊勢神宮などの戦後の復権を強行してきた。また、「天皇在位五十年」「六十年」を国家的式典として、戦争と敗戦という昭和史における大きな屈折を、連続する天皇の歴史として塗りつぶし、天皇賛美の気運をよりあげようとしてきた。こうして、戦争の最高責任者である天皇を、「平和天皇」のイメージで締めくくろうとしている。

本書はXデーを、こうした「総決算」路線との攻防の「正念場」と捉え、その闘いのための基礎資料として、過去の代替わりの歴史学的研究とキリスト教における具体的対応例を考察したものである。第一章は、靖国・国家神道の問題と長く取組み、今も日本基督教団靖国神社問題特別委員会の委員長である戸村政博氏が、大葬と即位大礼(六十一にもわたる儀式)にながなされるかを説明する。第二章は、「戦後の皇族葬儀考」を著した神奈川大学の中島三千男氏が、大正天皇の大葬について横浜の当時の

新聞を資料に、生活者の中におこったことを興味深く紹介している。第三章は、本学の田中真人氏(人文研)が、大葬後の即位大礼を裕仁の場合を中心に、「国民生活」との関わりで、経済的波及、警備・統制、動員の問題などを論じている。第四章は、本学の土肥昭夫氏(神学部)が、明治・大正の大葬と即位礼におけるプロテスタント・キリスト教の対応と、どうして組込まれたかをさぐっている。最後に、この四氏に加えて、自衛官「合祀」裁判を担当した弁護士今村嗣夫氏、日本基督教団紅葉坂教会牧師の岸本羊一氏の六人で、「Xデーとどう闘うか」という座談会を置いている。

Xデー後二年余にわたって展開される天皇の季節にそなえ、過去の「先例」をえ返し、主権者としての自立した判断を用意するためにも、本書の活用を強く薦めている。

千葉宣義(大学宗教主事)

木村俊夫先生古希記念論文集刊行会

『ことばの鏡——木村俊夫先生古希記念論文集——A Mirror of Words』

(英宝社・発行一九八八年三月
A55判・四五六頁 六、〇〇〇円)

大学文学部名誉教授木村俊夫先生は昨年、古希を迎えられた。一九四〇年、大学文学部英文学科を卒業され、すぐ文学部助手に就任された先生は以来、実に四〇数年におよぶ教育歴をお持ちであるので、数かぞえきれないほど多くの後輩を指導してこられた。本書はそういう先生の古希をお祝いするのに相応しい書物である。

木村先生はことばを大切にされた、一言一句たりとて軽視されたことはなかった。ご研究の対象の文学・演劇にたいしてもそうだったし、日常生活でもそうだった。標題からしてそういう先生に献じるに相応しい書物である——「ことばの鏡」——“A Mirror of Words”——。そしてさらに重要なことは寄稿論文に木村先生の学風が、先生から薫陶をうけられた方々の研究を通して、着実に、見事に伝えられ、結実して

いることである。先生は厳しい姿勢で研究に臨んでこられた。それが先生の銜いのない真摯な、重みと深さと幅のある学識を生んだのだと思っている。

木村先生の学風の特色はもうひとつある。それは、厳しくて温かい、温かくて厳しいお人柄に支えられていることである。これはお若い頃からそうであつたらしい。本書巻頭のお三人の先生の文章からそれがうかがえる。木村先生と同じ京都中京のお生れで、ハーヴァード燕京研究所の特別研究員として一緒に研究生活をおくられた京都大学名誉教授で現在は甲南女子大学教授の菅泰男先生と、故上野直蔵先生の未亡人で、英文学科同級生であられた帝国女子短期大学教授の上野久子先生と、英文学科で一年後輩であられた同志社女子大学名誉教授で現在は神戸女子大学教授の望月満子先生の文章には、お若い頃の木村先生のお人柄、学問への直向な姿勢が彷彿としている。先生のお人柄と学識を知りつくされた方々であるだけ、味わい深い文章である。木村先生のご専門分野はルネッサンス英文学、とりわけシェイクスピアであった。

そして、ショウやオニールの近・現代英米劇にもご造詣が深かった。それ故、寄稿論文の三分の一は先生のご専門分野に関するものである(寄稿者は坂本完春、藤田良子、尾崎寔、上田依子、吉田秀生、山口賀史、勝山貴之、近田小一、奥恭子、若山浩、南良成の各氏)。その他、英米の詩人、小説家、宗教家に関する論文(寄稿者は松井豊次、吉村宏一、源馬英人、松山信直、吉田美津、Hild 麻美、山下昇、遠藤芳江、今関恒夫、Mitsuo Tanaka、相浦玲子、村田辰夫の各氏)、英語学・言語学関係の論文(寄稿者は Teruhito Ishiguro、龍城正明、高尾典史、Kenji Ishihara、山内信幸、中田康行、Leo Loveday の各氏)があり、計三〇篇の論文が収録されていて、壮観である。

巻末に収められた奥氏と山口氏による「木村俊夫先生の略歴」と先生の主要著書論文のリスト、A・Y・氏による「編集後記」にも木村先生の学風とお人柄が滲み出ている。

なお、本書の贈呈式は去る五月二八日、新島会館で行なわれた。

児玉実英編

『エズラ・パウンドと日本——手紙とエッセイ』

（ブラックスワン・ブックス社・発行）
（九八七年縦240mm、横155mm版・二四九頁）

今世紀の代表的なアメリカの前衛詩人エズラ・パウンドの学究として夙に知られている児玉実英氏が、力作『アメリカ詩と日本文化』に続く第二作として『エズラ・パウンドと日本——手紙とエッセイ』を編集、昨年ブラックスワン・ブックス社から上梓した。そして、本書にサントリイ財団学術賞及び全米大学・研究所附属図書館協会「優秀学術書賞」が与えられたのは喜ばしい。

本書の構成は一四八通の手紙と十二篇のエッセイによる。手紙は一九一一年から一九二三年、一九三六年から一九六六年、一九五六年から一九六八年と、三部構成である。Ⅰ部は関東大震災で不慮の死を遂げる直前の画家久米民十郎の手紙で終わり、Ⅱ部は第二次世界大戦後から約二〇年を経た時点での前衛詩人北園克衛からパウンド

の娘メアリ・ド・ラッヘヴィルツ宛の手紙で終わる。なお、Ⅱ部とⅢ部とは年代の重なりも見られる。従って、各部を区分する論理は、歴史的に重要な意味をもつ年代の論理ではなく、交友関係の論理が働いていることが分かる。すなわち、Ⅰ部では舞踏家伊藤道郎と久米、Ⅱ部では北園、Ⅲ部では元慶応大学教授岩崎良三が中心であるエッセイはⅣ部に置かれ、『ジャパン・タイムズ』へのパウンドの寄稿文が収録されている。

さて、本書からは次の三点が読みとれる。
(1) 幼少時より実業家の父から能楽や狂言を教えられ、学習院中等科の同級生伊藤からパウンドを紹介され、ロンドンでパウストに謡曲を上演してみせた久米を通じて、パウンドの能への傾倒、(2) パウンドに前衛文学運動の指導者像を見る北園と、北園に東洋と西洋との相互理解の接点を求めるパウンドとのずれ、(3) 北園を通じてパウンドが『ジャパン・タイムズ』に寄稿し始め、やがて正式な通信員となる経緯、である。以上の三点は『読売新聞』の「海外の文化欄」（88年2月）、『海燕』（88年4

月）、『学燈』（88年5月）、『英語青年』（88年5月）の各書評子も指摘している。

紙数の関係上、次の一点を指摘して、本書評が屋上屋を架する愚を免れたい。

パウンドは一九三四年に『詩学入門』で詩を、メロポエシア（音楽の詩、フアンポエシア（映像の詩、ロゴスポエシア（ことばの詩）の三種に分類したが、早くも一九一〇年頃にトゥルバドゥール（詩人兼音楽家）にメロポエシアを発見していた節がある。トゥルバドゥールの詩ではことばが音楽と調和していたからである。それ故、一九一二年のカヴァルカンティのソネットの英訳と、一九一三年のギョーム・ド・ボワチュ、ベルトラン・ド・ポルン、ソルデロ等のトゥルバドゥールに関する論究（『クォーターリー誌』所収）とは、詩と音楽との調和に注目し始め、「詩が音楽から離れすぎると萎縮する……」（『詩学入門』）と考え始めた頃の作品であることが判明する。フェノロサ夫人のパウンド宛の手紙によれば、まさにこの頃に、つまり、一九一三年にパウンドはフェノロサの中国詩と日本の能の翻訳草稿とを託されている。パウンドがイ

エイツと協力して謡曲の英訳を完成させていく過程で能に発見したものは、詩と音楽との調和の紛れもない東洋の例である。ここで初めて、伊藤、久米、北園を通じて能を追いかけていく手紙の中でのパウンドの執拗さが納得できる。また、一九一六年に

エイツが『鷹の井戸』という詩劇を完成させるのも詩と音楽との調和を抜きにしては考えられず、伊藤を主役にしてロンドンで初演された後、エイツが語ったとされる「生涯探し求めていた形」（パウンドはこれが一九一七年頃だ、と「エッセイ・2」で言っているが）は、パウンドの「探し求めていた形」でもあった筈である。従って、一九一〇年頃に始まるパウンドの詩と音楽との調和を求める文学活動が、能、『詩学入門』を経て一九四〇年の「エッセイ・4」に「オペラでは歌手が素晴らしい音楽に合わせて美しい詩を歌いあげるのだが、音楽が言葉の意味に光をあて、強める……」と引継がれているように、パウンド文学の軌跡を形成するものである。この文脈に照せば、パウンドの伊藤や久米への親和性はパウンドの能への求心力と無縁でなく、さら

に、パウンドと北園とのずれは、北園の詩が前衛的であるとしても、パウンドが北園の詩に、詩と音楽との調和を発見できなかったために起ったずれと説明できる。

パウンドの語り口は男性的で自信に満ち、書簡体のあるべき一つの見本を見せてくれている。それは、パウンドの親分肌の詩人・教師・父親像と、金融資本主義体制への狂信的な批判精神と相俟っているからである。パウンドと日本、特に、能との関わりつまり、パウンド文学の軌跡が本書の手紙やエッセイに余すところなくあぶり出されている。

坂本完春（天学文学部教授）

小林章夫著

『チャップ・ブック——近代イギ

リスの大衆文化——』

（駿々堂・発行一九八八年四月
B5判・三八九頁 二、三〇〇円）

小林章夫氏は英国十八世紀を研究しており、同志社女子大学の中でも、英文学の分野で最も精力的に活動をしている学者の一人である。

今回の作品も、やはり、これまでの『コ

ーヒ・ハウス』（一九八四）『クラブ』（一九八五）『ロンドン・フェア』（一九八六）などに続く十八世紀のものであって、小林氏の興味も、前作の十八世紀の「風俗事情」、「生活史」、「裏面史」と同様、作品を作り上げていく土壌、背景という視点は変わっていない。

チャップ・ブックとはチャップマン（商人）が売り歩いた、または安価な（チープな）五十頁にも満たない、ほとんど二十頁（以下）ほどの小冊子である。そして全盛期は十八世紀。その歴史は十六世紀にさかのぼる。大衆が読んだ読み捨てに近いチャップ・ブックは、その九八%が失われてしまっている（三七九頁）。われわれは僅かに残された二%の隙間からチャップ・ブックの世界と十八世紀をのぞくのだが、小林氏は、本著で広い視野から、チャップブックの内容（バラッド、名作ダイジュスト、ポピュラーソング、謎など）ばかりでなく、その役割、社会的背景を浮き彫りにする。例えば、それがチャップ・ブックの値段と当時の物価表であったり、チャップ・マンの素材となった暗黒街のワルたち（第六章

「犯罪実録の盛衰」や、七章「無名の作家たち」、八章の「出版と流通」また第九章「民衆教育と識字率」などが、それである。本著に九八もの挿絵があるのも、識字率が絵で補う目的があったチャップマンばりであって楽しい。ちなみに本著は九章、四八項目、本文、三八二頁からなり、挿絵が九八。本著はわが国においてはチャップマンの本格的な、初の啓蒙書または手引書である、といって構わないであろう。ただ、小林氏はペダンティックになることを避け、注の類はのせてはいない。最後のところに参考文献として二十点ほどの書物を掲げている。一つだけ望むべきは小林氏のこれまでの作品同様、参考文献に出版年をあげておいて欲しかった。しかしこれがこの本の本質をいささかも下げるようなものでないことは云わずもがなである。十八世紀英国や、楽しいお話に関心がある方にはお勧めの書である。

杉野 徹（女子大学教授）

ドナル・ドキン著
金関寿夫訳

『続百代の過客 上・下』

朝日選書・発行一九八八年一月
四六判・上三三六頁 一、一〇〇円
下三三二頁 一、二〇〇円

アメリカの日本文学研究の第一人者ドナルド・キン氏は日本人の日記に興味を示している。『百代の過客』日記にみる日本人』上・下を四年前に、そして今年その続きを刊行した。合計四冊に及ぶ『百代の過客』正・続は平安時代から幕末・明治に至る一一〇〇年の間の日記一一二編を含んでいる。これらの書物を読むと、氏は日記の執筆者の「人間」を洞察しようとしていることがわかる。

さて、私は『続百代の過客』上に載っている「新島襄日記」を論評することを求められているが、この「日記」は朝日新聞の夕刊に昨年三月二四日から一〇回にわたって連載されたものである。氏は新島の「玉島兵庫紀行」、「航海日記」、「箱桶よりの略記」や *Life and Letters of Joseph Hardy Neesima* を用いて、新島の一九歳から二四歳のアーモスト大学入学の直前までを取

り挙げている。そして氏は元治元年函館を発って北米ボストンに着くまでの一年間の新島に強い関心を示している。それは日本人、侍新島七五三太から人間新島へ、そして漢訳聖書を通してキリスト教に傾斜していく後年のキリスト者新島の萌芽がこの時期に既に見られるからである。氏は文学者の鋭い感覚で新島の日記に見られるいくつかの山をおさえている。その一つは函館での生活、とりわけロシア病院での新島のカルチャー・ショックであり、新島の「密航理由書」を読んでA・ハーディーが「新島の志の強さと、まれに見る人格の気高さ（上p.300）に感動する個所であり、ニュー・イングランドに到着してから新島がキリスト教に回心していく過程である。氏は滞米中や帰国後の日記が「まことに感銘深い記録である初期日記」（p.300）に比べて「足許にも及ばない」という理由で、アーモスト大学入学の直前で「新島日記」を終えているのは残念である。せめて帰国するまでの新島を描いてほしかった。もう一つ不満を述べるならば、次の点である。セイボリー船長が新島の密航を幫助したことが

船会社に露頭し、解雇されたことを知らされた新島は日記に「嗚呼、予、先甲比丹をして不幸に陥らしむるは実に笑止千万(はなはだ気の毒)之事なり。然し過去(の)事如何とし難し、他年学成の後彼に仕へ、万方其恩を報せば、恐らくへ少しく予罪を償ふに至らん」(航海日記)と記している。しかし氏は「…案の定、事件が発覚した時、この船長は以後日本へ来ることを禁じられている。」(p. 291)と簡単に書くだけで、ポストン港でのセイボリー船長との劇的な再会についての新島の日記にも触れていない。人間新島を見る上で重要な個所を見落したといわざるをえない。また氏は一個所読み違いをしている。それは航海日記に「July 20th, 波止頓へ落錠」と書かれているのに、次の行の「Monday 24 July 今日、波斯頓に上陸せり」の方を読んで、「やっと目的地ポストンに着いたのは、七月二十四日であった」(p. 299)と書いてある個所である。

なお、『百代の过客』の正・統ともに訳者は本学の英文学科を卒業した金関寿夫氏であることをつけ加えておきたい。

井上勝也(大学文学部教授)

森 浩一編

『古代翡翠文化の謎』

(新人物往来社・発行一九八八年三月)
B6判・二五六頁 二、〇〇〇円

一九三八年、糸魚川市姫川支流小滝川で翡翠の鉱脈が見つかり、日本国内で翡翠が産することが初めて確認された。縄文時代の鯉節形をした大珠や、弥生・古墳時代の勾玉などの翡翠で作られた遺物の原材料産出地は、それまで考古学上の大きな疑問点であり、上信越あたりから出るのではないかという先見的な意見もあったが、中国大陸や朝鮮半島から輸入したものととして議論されることも多かったので、この発見は鉱物学者よりもむしろ考古学者の待ちのぞんでいたものであったといえる。

小滝川の翡翠が発見されてから半世紀が過ぎようとしている一九八六年九月、糸魚川市とこれも一九五五年に翡翠が発見された青海川を持つ青海市が中心となって第一回目の「シンポジウム 古代翡翠文化の謎」が開催された。本書はその記録である。現代、翡翠と聞けば多くの人はカンザシ

に留めにと、珊瑚と並んで和装を彩る格調高い日本的な宝石を思いうかべるであろう。しかし、翡翠が和装と結びつくのは近代にはいつてからであり、奈良時代から明治時代末期までの一千年以上の間、日本人は翡翠とは無縁の生活を送っていた。

古代の日本人にとって、翡翠とは何であったのか、なぜ日本に翡翠が産出することすら忘れ去ってしまったほど顧みられなくなってしまったのが、このシンポジウムの課題はそこにある。

冒頭、総合司会森浩一先生の「翡翠は勾玉という形を通じて日本特有の造形物となり、それが日本の古代文化を非常によく象徴しているが、それが奈良時代をもって消えているというのは、前方後円墳とよく似た現象であり、翡翠の研究が日本文化の進展を側面から解くのではないか」という言葉はそのことを端的に表している。

今回のシンポジウムでは、日本の翡翠文化がメソアメリカと並んで世界最古のものであること、分析をおえた日本各地の二十六カ所の遺跡の翡翠がほとんど総て糸魚川地域の原石を使用していること、万葉集に

歌われた奴奈河が姫川であり、この河の玉、と翡翠が不老長生の不思議な力を持っている信じられていたこと、それは中国の玉の文化と連動している可能性があること、その翡翠を産するこの地域が特別な思いを持って見られていたこと、などが明かとなった。

ただ、第一回目ということもあって、多くの問題を残したまま不十分な討論で終わってしまったという感があることは否めない。

「お互いに他分野の水準や困難な点を知りあうだけでも意義があるのではないか」という森先生の言葉どおり、これを叩き台にしてこの秋に開かれる第二回目の、そして再来年の第三回目のシンポジウムに期待したい。

なお、巻末に縄文時代の硬玉製玉類出土遺跡一覧があり、研究の基礎資料を提供してくれている。

中村 潤子（大学文学部非常勤講師）

仲村 研著

『中世地域史の研究』

（高科書店・発行一九八八年五月
A6判・三九七頁 七、〇〇〇円）

著者は、一九六八年に『山国隊』（学生社）を刊行して以来、今日にいたるまで数多くのすぐれた研究成果を陸続と公けにきて来ている、まごうことなき学問の生産者である。各地に埋もれた史料の中から明治維新に隠された農兵隊の栄光と悲劇を軽妙な筆致で描いた処女作から暫らく時をおいて一九七八年には、着実な史料操作の上に組み立てられた重厚な著作『荘園支配構造の研究』（吉川弘文館）を発表している。ついで、一九八四年には『中世惣村史の研究』（法政大学出版局）、また共著として『は秋山国三氏と「京都「町」の研究』（法政大学出版局）を一九七五年に、それぞれ公刊している。一方、学問としての歴史学研究における共通の広場としての史料の公開性・確実性を重視する著者は、『紀伊国阿氏河莊史料一・二』（吉川弘文館）を一九七六・七八年に、『今堀日吉神社文書集成』（雄山閣）を一九八一年にまとめて、

日本中世史研究を志すものにとって有難い礎石を築いて呉れている。

処女作『山国隊』のテーマも示唆するよう、著者の当初の問題関心は吉田松陰以降の日本近代思想史の展開過程にあったのだが、石母田正の『中世的世界の形成』の魅力に惹かれて氏は中世史に転向した。ここに紹介する近著は、この転向五年後に初めて活字化した論文など、一九六〇年から一九八五年まで二五年間にわたって書きつづったものを一書にまとめたものである。というと、何でもないように思われる向もあるが、実はそうではない。一気呵成の場合はいざ知らず、四半世紀にもわたって、一書にするに値する主題と関心を一貫して持ち続けることは結構むづかしいものである。その意味だけでも、紹介者は深く敬意を表する。

理論のための理論に流されず、とり上げるに値する歴史的事実を着実におさえて行くのが氏のすぐれた資質のひとつであるが、第十一章中世の町と町衆には、中世史の専門家でなくてもよくわかる形で、それが示されている。林屋辰三郎の業績を生産

的に継承しながら、何故「まちしゆ」ではなく「ちようしゆ」と呼称すべきかを極めて納得し易く述べている。

現代日本は生産倫理から浮き上って「資産効果」を求め右往左往する人に満ちているが、大学もまた学問の消費者が闊歩するかに見えるなか、仲村氏のような学問の生産者が今また本書を世に送り出したことを心から喜ぶたい。

藤田貞一郎（文学部教授）

ウォルター・ラカー著

高坂 誠訳

『ユダヤ人問題とシオニズムの歴史』

（第三書館・発行一九八七年十二月
B6判・九九〇頁 六、〇〇〇円）

日本では「シオニズム」は比較的なじみが薄いし、それを考察の対象とした研究文献も皆無に近い。世界的に著名な現代史家の一人であるウォルター・ラカーの本著書は、シオニズムの歴史を通史的かつ包括的に精緻に叙述した基本文献で、シオニズムに関する最初の、そして唯一の全史と呼べるものである。シオニズムは、ナチスによ

って頂点を極める近代ヨーロッパの反ユダヤ主義と、中東紛争の核心とされるパレスチナの「ユダヤ人国家」＝イスラエルをめぐる問題の、双方をつなぐ最も重要な環であり、今日でも国際政治に大きな影響を及ぼし続けている。本書は公開・未公開の史料をふんだんに駆使して、フランス革命以降の解放の時代の前史と一八八〇・九〇年代から一九四八年のイスラエル国家樹立までのシオニズムの歴史を運動としてのダイナミズムを軸に描き出している。

著者W・ラカーはシオニズムに好意的だが、けっして無批判ではない。できるだけ公平に当事者自身の言葉で語らしめようと努力は、著者の保持している冷厳ともいふべき現実政治への視座と相まって、この現代史の重要な側面の研究をいっそう価値あるものにしていく。W・ラカーは、現在でも旺盛な研究活動を続けており、ワシントンのジョージタウン大学教授とロンドンの現代史研究所およびウィナー図書館の所長を兼ね、その研究領域は中近東からファシズム・共産主義まで多岐にわたっている。日本での翻訳書も本書のほかにか

『ワイマル文化を生きた人々』（ミネルヴァ書房・一九八〇年）、『ドイツ青年運動－ワンダーフォーゲルからナチズムへ』（人文書院・一九八五年）など数点を数える。

本書には冒頭に登場人物を中心とした魅力的な三十枚近い写真が収められており、巻末には四八頁にわたる使いやすい索引が付されていて、本書の史料価値をさらに高めている。訳文は表現にやや硬さがあるものの正確・丹念であり読みやすい。また、本主題に不案内な読者のために若手現代史研究者である訳者の丁寧な解題がつけられている。これを読むと、千頁に及ぶ本訳書に多年を費やして困難な作業に取り組んだ訳者の真摯な姿勢の一端をも窺い知ることができる。

日本におけるシオニズム研究の今後の進展に本訳書が寄与することを期待したい。

北村日出夫（文学部教授）

玉井敬之著

『漱石研究への道』

（桜楓社・発行一九八八年六月
B6判・二五二頁 四、八〇〇円）

本書は、著者にとって『夏目漱石』（昭

51・10、桜楓社)につづく二冊目の漱石論である。「前著の上梓以来、漱石研究の状況は大きく変化したと思われる。」と著者はいう。たしかに近年の漱石研究は、日本の近代文学研究のレベルそのものをあげたかたちで実にめざましい展開をみせている。そして著者はかかる研究状況にあつてたえず炯眼なる視点をもって漱石学の構築にかかわってきた研究者の一人であつた。

本書の前半は、前著刊行後に発表した作品論六編をおさめる。「三四郎の感受性」では、三四郎の美的感覚が「耽美主義者」の青年に漂う世紀末的な雰囲気にもとづくものであることを論証する。さらに「宿命」の自覚ということを通して、広田先生の結婚しない理由と美禰子の早急すぎる結婚の理由とを明らかにする。「行人」論への一視点」では、「友達」の章を独立した短編としてとらえ、「人間の離合」という問題が「行人」の主題に深くかわかることを指摘する。「行人」論覚書」では、その「人間の離合」という問題を一郎とお直の「夫婦といふ関係」においてきびしくみつめな

おす。『こゝろ』二題」では、小説の舞台となる下宿の間取りや明治天皇と昭憲皇太后の死の意味を解き明かす。『こゝろ』から『道草』『明暗』へ」では、先生の自裁がどのように「思想家」としての自己を完結させるにいたつたのかを追究する。そして「天理図書館蔵「私の個人主義」をめぐる」は、上述の作品論とはいささか性格を異にする。しかしある意味ではあるべき「作品」論としてもっともスリリングな興奮と感動を覚えた。私見によれば、注記された「淋しさ」へのこだわりは著者自身の人間観(ひいては漱石観、文学観)の根源的なものをかいまみたような気さえた。

ところで、後半の論考に対して言及する余裕をもたねが、石山徹郎、榊原美文、羽仁新五らの先達の仕事を、漱石研究への道につながるものとして位置づけようとする点にこそ著者独自の研究姿勢があるといえよう。本書が著者にとっても漱石「人間学」への道をきわめるためのゆるぎない道標でありえる所以もまたここにあるといえようか。

太田 登(大学文学的囑託講師)

吉野政治者

『漢字の復権』

(日中出版・発行一九八八年四月)
A5判・一七三頁 一、五〇〇円

漢字についての概説書は数多くあるが、それらは中国での漢字の成立、日本への伝来、日本での変容を説くのが一般的である。その中であつて、本書の特色、新しさは著者自身が書いておられるように、「日本と同じく漢字文化圏にあつた朝鮮半島での状況と比較している」(はじめに)ところにある。

本書は、I部「漢字と仮名と漢字仮名まじり文」、II部「日本語はどのように書かれてきたか」の二部からなっているが、ここでは紙幅の関係でそれぞれから一節ずつ紹介しておきたい。

中国より伝来した漢字を用いて、日本語が漢文で書かれることになるが、そこには中国語には無い敬語が「賜」によって表記される。これは明らかに朝鮮における漢文の影響であり、渡来人の手によるものであるという(II部3「日本式漢文の登場」)。

また当初、漢文によって書き表すことが

できたのは、名詞、動詞などのいわゆる自立語のみで、文法的働きをする用言の活用語尾・助動詞・助詞については表記されなかった。ところが漢字を表音式に用いて日本語を表記する万葉仮名によって、そうした言葉も表記することができるようになった。しかし万葉仮名も日本にのみ見られる工夫ではなく、朝鮮にも同じような漢字の用法が見られたという。たとえば『唯人伊』の「伊」は漢字による、朝鮮語の主語を表す「い」の表音表記であり、片仮名の「い」のような略体まであるそうである（I部2「仮名はどのようにできたか」）。

本書には、右にごく一部紹介したように、古代の朝鮮における漢字の受容と比較して、日本語における漢字の受容、変容が要をえて、平易な文体で紹介されている。朝鮮における漢字の受容について述べたところは朝鮮語字に不案内の者にとって教えられることが多い。

漢字は、本書で取り上げられた漢字文化圏の東の端の朝鮮・日本に伝来した以外にも、大陸の中で契丹文字、西夏文字、女真文字を作り出していった歴史があるが、漢

字を利用して自己の言葉を表そうと工夫した点では変わりがなく、単語文字、漢字の持つ不思議な力とでも言えよう。

『漢字の復権』という書名は、漢字にある価値を持たせているかのように見え、意見がないわけでもないが、漢字の持つ文字としての力の大きさを言い表したものと受け取っておきたい。

著者の最近の論文に「官符文の文体」があるが、本書によってこれまでの先行研究を整理されたのであるし、その上立って漢字文の研究を新しい視点から掘り進めて行かれることと思う。

最後に、版を改められることがあれば、後学のために参考文献一覧を是非付けられるよう注文しておきたい。

なお、本書は全国学校図書館協議会の選定図書に選ばれている。

浅野敏彦（大阪成蹊女子短期大学教授）
落合仁司著

『保守主義の社会理論——ハイエ

ク・ハート・オースチン』

（勁草書房・発行一九八七年十二月）
（B6判・一八九頁 一、六〇〇円）
マスコミなどを通じて「保守主義」とい

うことばをしきりに耳にするようになったのは、レーガン大統領やサッチャー首相の登場以降である。しかし本書で論じられている「保守主義」は、このような政治や政治学の世界におけるそれではない。それは、社会哲学としての保守主義であり、進歩主義に対する批判としての保守主義である。

著者によれば、近代の進歩主義にはいろいろな傾向があるが、いずれも合理主義と個体主義を信奉している。しかし合理主義は、人間やその社会の制御不可能性を閑却しており、個体主義は、人間とその社会の還元不可能性を無視している。このような合理主義や個体主義を懐疑し、伝統や権威への信仰を擁護してきたのが、バーク以来の近代の保守主義である。とされている。つまり本書のモチーフは、近代の進歩主義批判であり、それを擁護してきたあらゆる思想、哲学、社会科学とその産物への批判である。

ところで本書で論じられているのは、通常、保守主義の思想家としていわれるヒュームやバークではなく、副題にあるハイエク、ハート、オースチンである。彼らはそ

れぞれ経済哲学、法哲学、言語哲学の大家である。彼らがいかなる関係で結びつくのか不思議に思う読者があるであらう。しかし著者は、彼らの哲学をそれぞれ検討しながら、それらの根底に流れているもの、つまり制御不可能なもの、個人の意図に還元しないもの、語りえないもの、黙示的なものをクローズ・アップしようとするわけである。具体的には、ハイエクでは「自生的秩序」が、ハートでは「承認のルール」とその背後にあるコンベンションやブラクティス、またオースチンでは「行為遂行的発言」やその根底にあるルール、コンベンションが取り上げられている。これらの自生的秩序やコンベンションなどは、合理的に制御したり、個人の主観的意図に還元したりすることの不可能なものとして描かれている。

本書は、社会哲学の書物でありながら、きわめて平易で、わかりやすいスタイルで書き進められている。思想としての保守主義への賛否には関係なく、ぜひ一読をおすすめしたい。今日の言語哲学、法哲学などの成果が的確に叙述されており、それらの

一端を垣間みることでできるだけでもおおいに楽しく、かつ有益であるであらう。

深田三徳（大学法学部教授）

三塚武男著

『部落解放のまちづくり』

（部落問題研究所・発行一九八八年二月）
（B6判・二二六頁 一、九〇〇円）

本書は「部落問題」＝「同和問題」という社会問題を社会科学の視点から解放運動の長い歴史の歩みにそって現状の諸問題を究明している。昭和四十年「同和对策審議会答申」がだされ、以後、全国的に同和对策事業が展開するが、この住宅改良事業、環境改善公共施設の設置、同和教育の推進などの諸事業に関連する諸問題を日本の産業構造の大きな変化と高度経済成長の影響との関係を重視し、巾広く論理を展開しているのがユニークであり、とくに、同和地域のまちづくり問題に焦点をあて、住民本位の地域社会のあり方をわかり易く、多くの資料を駆使しながら大きな変貌のなかで科学的な解放の道順を見い出そうとしている。本書に底流しているのは、著者の「部落解放」への熱情であり、不当に残っている

る前近代的な身分差別意識への怒りといえる。本書は多岐にわたる「部落問題」を論究しているが、一貫している論旨は人間の自由と平等、基本的人権の確立、社会保障制度や社会福祉施策の遅滞と矛盾の指摘、国と行政の責務の追究、労働運動と解放運動の連帯と統一、民主的な同和教育のあり方、地区改良施策の推進と住民の自主的な運動を中心にすえていることである。

本書は大きく三つに分かれている。第一の「序章」は「部落問題」の本質とはなにか」という問題提起を九つの項に分けて論じており、第二の「部落問題と労働問題」は「部落問題」を部落内部の諸問題に限定せず、著者の専門分野である資本主義の高度化にする労働政策、雇用労働の問題、社会保障、社会福祉施策との関連において把握し、「部落問題と社会保障、社会福祉」「部落の変化と住民生活」「労働運動・労働政策と部落問題」の三節に分けて、それぞれ具体的な施策をあげて批判、究明している。第三の「住民の自立とまちづくり」は本書のもっともユニークな論点であり、住民の自主的自発的なまちづくりの方向を

三節に分けて、「まちづくり」の基本的課題を民主的な「仕事づくり」に焦点をあてて論究している。短文では論評しきれないが、著者と筆者とは学生時代から同じ社会問題意識をもち、多くの社会調査も行い、たえず、著者の鋭い分析力と洞察に敬意をもち、真面目で粘り強い研究態度に敬服してきた。本書は著者のそのような研究からの一つの成果であり、解放運動に大きく貢献する文献として推薦したい。

住谷 馨（大学文学部教授）

小橋 一郎著

『会社法』

（成文堂・発行一九八七年十一月）
A5判・四七八頁 三、七〇〇円）

本書は、新版手法小切手法講義（昭和五十七年 有信堂）、商法総則（昭和六〇年 成文堂）につぐ著者の会社法の体系書である。改正が頻繁におこなわれる分野にあって結果の妥当性のみを重視するあまり、ともすると理論的裏づけが軽視されがちななかにおいて、確かな基礎にもとづく精緻な解釈に徹して書かれた本書は、会社法の基礎理論が余すところなく詳論されており、

会社法における著者の基本的な視点を知ることができ。

本書は、全体としてはオーソドックスな体系によっているが、各所に著者の自説が展開されている。たとえば法人の法理について、社団法人は法人格を有することによって組合や権力能力なき社団と対立する觀念であり、組合が団体として対外的に活動する以上、組合と権力能力なき社団との区別は必ずしも明確ではなく、組合の組織はその団体の濃淡を任意に定めうるから、権力能力なき社団を組合の觀念に包摂することも可能である。したがって法人ないし社団法人と権力能力なき社団を含む有合的組合とを対立させるのが適当であるとされる。つぎに通説は、発起人組合とは別に、発起人が会社設立のためにする行為によって生じた権利・義務が成立した会社に帰属することを説明するために「設立中の会社」の存在を認める。しかしそれは会社成立の場合の説明にはなっても、会社不成立の場合にはあまり用をなさないとい説かれる。また商法二六二条は外観法理（Rechtschein-theorie）の一具現であるとする通説にたい

し、この法理の妥当性に疑問をもたれている著者は、同条に例示されているような名称の地位に取締役を任ずることによって会社は対外的にその地位に相応する代表権を有することを表明したものとみるべきで、その代表権は単なる外観ではないとされる。さらには商法二六五条についても新しい解釈を提唱されている。

本書は、会社法についての学説・判例の状況を明らかにしたうえで著者の見解が主張されており、改正によって新設または修正された重要な規定についてはその経緯についても解説され読者の便宜をはかっている。またドイツの学説についても随所に紹介されている。このことから本書は、会社法を本格的に勉強しようとする者にとって必読の書であるといえよう。

栗山 修（神戸市外国語大学助教授）

C・B・マクファーソン著

谷川昌幸訳

『パーク——資本主義と保守主義』

（御茶の水書房・発行一九八八年二月）
四六判・一一二頁 一、八〇〇円）

『フランス革命の省察』の著者パーク

(一七二九—一七九七)は政治思想史上一八世紀啓蒙思想、およびその政治的帰結たるフランス革命に対する最もラディカルな批判者として、したがってまた一九世紀の保守的なロマン主義に少なからぬ影響を及ぼした思想家・政治家として知られている。この点に関するかぎり、バークは、彼が一八世紀精神の悪しき代表者として手厳しく批判した思想も気質もまったく異なるもうひとりの一八世紀人ルソーと皮肉にも同じ精神的土壌に位置する者として理解することができる。

ルソーと同じくバークも政治から文学まであらゆる主題について書くことができる屈指の文筆家であった。しかしルソーとちがってバークはなによりも実政治家であった。政治家として彼は生涯自らの思想を現実政治に政策として、反映させようとした。したがってバークには抽象的で体系的な「政治哲学」の書は存在しない。必ずしもだからというわけではないが、同時代人およびのちの歴史家は彼の思想を様々に解釈することになる。

フランス革命以前のバークはおおよそ

ところ穏健改革派ホイッグとみなされていたが、革命のぼつぱつにいたって彼は一転して反革命の論客、伝統の擁護者とみなされる。一九世紀になるとバークの自由主義的側面が強調され、ロックの正統の後継者として位置づけられる。さらに二〇世紀にはいると冷戦文脈のなかで新たな装いのもとに反革命主義者、伝統主義者バークの像が復活する。要するにバーク像はそれだけの時代に様々なニュアンスでもって、伝統的保守主義者と功利主義的自由主義者へと分裂してきたのが実情である。

このいわば「バーク問題」に対してひとつの解決をあたえようとしたのが本書である。著者は解決の糸口を「政治経済学者」バークにもとめ(これは『所有的個人主義理論』の著者として独自の視点であろう)、「彼が・・・伝統的秩序を尊重する態度を示したことに疑問の余地はない。だが彼の想定する伝統的秩序はすでに資本主義的秩序になっていた」という認識を軸にバークの「実像」を提出しようとする。これは当然ながらバークを一貫したブルジョワ・イデオログとして捉える解釈につながる

が、この結論にはこの著者のつねでやスウィーピングとの感がある。とはいえ訳者が「解説」で指摘しているように「ああもいえるし、こうもいえる」という類の研究よりは、明確に「現代」の視点が打ち出されているだけに一般読者にとっては興味深く読めることは事実である。

なお訳文は明快であり、とくに訳者「解説」は本書のモチーフを理解する上で大いに役立つことを付記しておく。

富沢 克 (大学法学部助教)
嶋口充輝・石井淳蔵共著

『現代マーケティング』

(有斐閣・発行一九八七年十月
B6判・二一七頁 一、三〇〇円)

本学石井教授が慶大嶋口教授との共著で出されたもので、全体を通じて考え方、表現なども統一されていて一貫した主張が明らかにされている。

最近のマーケティング研究ではいわゆる戦略論に多くの関心が集まっている。本書は戦略的マーケティングを事業への資源配分と事業の目的に着目するという点で従来のマーケティング戦略と異なる(五二二頁)

ジ」と指摘したうえで、顧客に価値を提供して顧客あるいは市場を創造する（はしき）ための戦略の方策が説かれる。

全体をⅠ部マーケティングの基本的役割と発展、Ⅱ部環境の分析、Ⅲ部戦略対応に分ける。このうちⅠ部で戦略的マーケティングの基礎概念をとりあげ、それは事業の経験、製品ポートフォリオなどによって支えられた科学的、合理的なマーケティング意思決定の枠組となるものであるとする。

ここで、戦略とは「企業の方角づけである」（一九ページ）とし、それは「適切な事業の定義に裏打ちされた戦略ドメインを軸に全体戦略がつくられ、さらにその中で個別事業戦略や機能戦略が形成される」（一九一ページ）ものであって、このような観点から戦略的マーケティングの基本的方向づけをしていることになる。

本書によると戦略的マーケティングの基礎は事業の定義、すなわち事業の内容、性格をいかに規定するかということを出発点とし、それによって戦略ドメイン（戦略的に向づけられた生存領域）として「企業が長期的に自社の存立を委ね、経営資源を

効率的に投入していく市場内生存領域」

（二九六ページ）が決定される。それはマーケティング活動の基本方向ということになるのであるが、本書は全体を通じてこの基本方向の意味とそれを具体的に構築するために必要な諸条件の分析をとりあげながら現代マーケティングの流れをのべている。

本書は従来のマーケティングマネジメントの観点からの書物と違って、個別のマーケティング活動についての説明は抜かれていない。このためマーケティングの基礎知識がないと理解しにくい点もあるが、現代マーケティング研究の流れと方向を理解するためには好適な書物であり、関係分野の方々に広くお奨めしたい。

木地節郎（天学商学部教授）

木地節郎・吉田裕之共著

『現代流通の課題』

（啓文社・発行一九八八年一月
A5判・二六二頁、二、六〇〇円）

筆者は本書の冒頭で次の如く開題する。

「最近、流通問題は広く関心を持たれるようになったが、流通関係の書物はそれほど多くはない」。正に筆者の言の如く、私

の書棚には、本書を加えて二冊である。

私の書庫には、商業やマーケティング関係図書・資料は逆に百数十冊にのぼる。こうした情況のもとでの提題であるから、筆者はまず流通の概念づけから記録することになった。

『流通』というのはごく戦略的な言い方をすれば商品の移動のことを指しているが、その移動も単なる移動ではなく生産者から消費者、使用者への社会的移動のことである。……有形、無形の生産物がそのなかに含まれる。しかし、多くの場合流通論の対象となるのは有形財としての商品である。そして、『流通問題の中心になることは次の諸点である』、すなわち『生産者の生産物、生産者から消費者、使用者への移転、移転には人格的移転、物的移転がある。社会的移転である。経済的移転がある』との基本的性格論をかかげて、その属性が展開される。

まず、流通機能論も完璧に近い理論の枠組と認められた。わが国における機能論は昭和十年代に遡及して広く文献の照会があり、それら諸文献を通して私自身の足蹟を

省みる機会を与えられた。

流通機能論は本書の焦点の一つである。

流通機構とその構成についての追求も手際よくまとめている。

つぎの「流通経路」は重点の一つであるが、その歴史をまず論じ、流通機能についての探求は必読点であろう。とくに図4—1は、一覧して全容の把握が可能である。経路機能に示されているように、流通各段階の商品の流れは最も注目をひく点である。とくに最近、ますます顯著に経路は、それ自身を变革しつつある状況を鋭く検討せねばなるまい。そこで問題となるのは流通費用のもつ課題であるが、著者はこの点を詳述している。

そこで問題となるのは卸売商業である。著者は、したがって一つの力点をここにおいて分析していることは妥当なる判断であり、流通費用論としての専門家としては考慮すべきであろう。かなりの枚数を「卸売機能(第5章)に充当していることは妥当な判断であり、著者が42頁をこの点に配していることは科学的な分析手法である。

次の課題は、必然的に小売商業に移る。

私(竹林)は昭和十六年発刊の拙著において、資本主義社会における「相対的過剰人口の貯水池」と規定した一文を発表し、最近においても、若干の訂正はしたもの、基本的態度は現在も不変である。したがって、「第6章小売機構」の筆致は充分検討した。ところが筆者の分析感覚は鋭く、その論旨から教示をうける点が多であるとともに流通システムの全体のなかでも問題点も多い。

第9章の商品別流通構造は流通問題としてのみならず国民経済の見地からも、現在将来にわたって常に問題の山積する部門である。一言にして云えば、流通問題のすべての問題が集約されてあらわれる場面、それは価値実現の最終場面にほかならないからである。すなわち、生産業者、運輸業者、保管業者、金融業者たるとを問わず、あるいは、それらに寄属する人々がすべての、彼等が流通過程に参入する場合、流通費用として登場してくる不可欠の条件である。例えば、第9章「商品別構造」においては、商品別、業種別、業態別の細部に入り、或は図形化、或は数字化した、かなり複雑

なる流通経路図表が示されており、その点においては、まこと細目にわたる分析がこころみられてはいるが、流通費の分析的解説は、更に分析を深耕されたい。

もちろん、流通部面の担当各部門としても流通費問題に大なる関心と、その問題に取組む姿勢も充分に評価もできる。しかし流通情報関連の費用は、情報機器の発達によって、それに対応する企業の費用負担の増加の傾向には変化がない。したがって情報費用の研究は大きな課題となっている。

次に流通問題における国家権力の介入問題がある。流通問題は一部分においては国際的な問題にまで展開しており、その傾向は将来、ますます増大するものと考えられるが、この問題に対する現状並に未来像は流通産業に及ぼす影響が重大化している。著者はこの課題に積極性が豊い。

以上、本書の訴究している諸点の若干についての概要を述べたが、未開の分野への開拓の成果と、貢献度を高く評価するとともに課題研究に大きく前進を示されたことに對して、深謝する次第である。

竹林庄太郎(大学名誉教授)

『公的意思決定の構造と効率』

(啓文社・発行一九八七年十二月)
B6判・二九八頁 二、八〇〇円)

優れて正統的な公共経済学の解説書である。公共経済学という学問は、効用なり利潤なりの最大化を目的とする、個体の選択の集計としての市場という社会制度によって、その適切な選択に失敗する何ものか、いわゆる公共財と呼ばれるものを、適切に選択しうる社会制度を模索する学問である。通常、軍隊や警察といった、社会秩序を強制的に維持する財・サービスが、最も典型的な公共財として挙げられるが、たとえば、教育や医療さらには環境保全といった、部分的には市場制度によっても適切に選択しうる財・サービスもまた、公共財として考えるべき特質を備えている。あるいは、市場制度によって適切に選択しえず、むしろ市場制度の作動する前提となるものを、公共財と考えるならば、所有や契約やさらには損害賠償などを規律する民法はもとより、商法や刑法や訴訟法を含む、法制度それ自体もまた公共財に外ならないし、

さらには、憲法や行政法を含む、政治制度それ自体もまた公共財と見なせよう。公共経済学は法制度の設定や維持を含む広範な政府活動をその対象としているのである。

本書は、第一章において、このような公共財の純粹理論を解説する。そこでは、公共財が、市場制度によって適切に選択しえないことが、厳密に明らかにされる。続いて、本書は、公共経済学の正統に従い、公共財を適切に選択しうる社会制度の候補として、民主主義的な投票制度を取り上げる。本書の中心部分である第二章から第七章までは、そのような投票制度の作動を、政党や官僚の行動をも射程に収めつつ、詳しく分析することに費やされる。公共経済学において近年得られた成果の集大成である。最後の第八章において、本書は、民主主義的な投票制度に代表される、公共財の選択制度それ自体の選択、言い換えれば、市場制度や投票制度の前提となる社会的なルール、いわゆる立憲的なルールを選択する問題をとり上げる。この問題は、社会的な選択のルールそれ自体を選択する問題、すなわち、自己の選択の根拠それ自体を選択す

る問題として、社会理論上極めて論争的な、いわゆる自己組織の問題となっている。この問題を取り扱う本書の立場は、立憲的なルールを、社会契約説の正統に従って、社会構成員全員の合意による合理的な選択の対象として捉える立場である。

しかし、市場制度、すなわち、総ての個体の合意による選択の制度によつては適切に選択しえない、公共財という事態を、投票制度、すなわち、多数の個体の合意による選択の制度によって適切に選択しうるのか否か、また、社会的な選択の制度それ自体は、果たして合理的な選択の対象となりうるのか否か、という二つ問いは、依然として開かれた問いであるように思われる。

落合仁司 天学経済学部助教授

岡 光夫著

『日本農業技術史——近世から近代へ』

(ミネルヴァ書房・発行一九八八年一月)
A5判・三二四頁 三、五〇〇円)

本書は、日本農業技術の発達を近世から近代(明治期)にかけて観察したものである。しかし、農業技術全般についての観察

ではなく、稲、綿、タバコの三つの作物を中心に栽培技術の歴史を辿り、最後に農業技術の普及に功のあった老農に照明をあてている。本書の構成を紹介すると、

第一章 近世稲作技術と近代への展開

第二章 乾田化と牛馬耕

付論 乾田裏作と日本文化

第三章 綿作技術の展開

第四章 タバコの伝播と生産構造

付論 寺院の茶

第五章 農業技術の推進者たち―老農の成立と時代的性格

付論 幕末期豪農の技術普及

一、二章が稲作技術の発展史であり、稲作技術の改良と深い関係のある裏作としての菜種作と「夜の世界」(日没後の生活)について付論を設けている。また、四章のタバコの伝播と関連させて、寺院の茶の生産が衰微した事情を付論で説明している。というように著者は三種の作物を主題としながら、関連の現象にも目をくばり、視野の広いところを見せる。著者の長年の研究のじみ出た箇所でもある。

近世の稲作技術の発展については、種子

交換、金肥の普及とその施用法の改良、反当播種量の減少(うすまぎの普及)、排水技術の進歩(乾田化と牛馬耕の普及と結びつく)などの観点から整理している。各地の事情を豊富な資料を用いて整理することにより、技術改良の方向を示すという叙述法をとり、読者には分りやすい。

綿作の研究は、戦後非常に進んだ分野であり、本書は、よく諸研究を集約している。綿作についても種子交換、多肥化の進展、土質と耕作法の改良などの観点から整理している。先進地畿内では金肥(干鰯)を多用したが、近世後期には干鰯価格が騰貴して綿作衰微の原因となったとしている。この期に綿作を発展させた伯耆では安価な藻葉(ぼんだわら)を使用し、生産を発展させたとしている。

タバコについても、その伝播事情、生産技術改良について各地の状況を詳細に整理している。主穀であった米の生産以外の生産について制限のきびしかった幕藩社会において、タバコの生産と飲用の普及は、目をみはるばかりの早さであった。タバコ技術の改良はコスト高を伴わなかったため、

綿とちがって明治以降の外国産タバコと競争しえたと著者は主張する。

本書は著者の長年の研究成果の一部であり、地味で着実な蓄積を感じさせる好著である。時代別、地域別、作物別の豊富な事例の収集には長い年月を必要とするし、それらを整理して農業技術改良の方向を示すことには、洞察力を必要とする。本書は専門家の研究業績のひとつのタイプのモデルとなりうる労作である。

安岡重明(大学商学部教授)

坂本礼二郎・玲子著

『お母ちゃんごめんね、長く生きられなくて』

(あすなろ社・発行一九八八年四月
四六版上製・二五四頁 一、四〇〇円)

感動的な書物である。この本の主題である坂本正子さんは、同志社大学文学部英文学科一九八一年三月の卒業生。急性淋巴性白血病という難病のため、昨年五月一六日、二十八歳の若さで天に召された。不治の病であることを宣告された時の、ご両親の気持はいかばかりであったことだろう。ご両親は娘の命を救おうとして、ありとあら

ゆる手段を尽くされた。その一日一日は、死を相手にしての、壮烈な戦いの毎日であった。正子さんの方でも、自分の命運を意識しながら、命ある日々を燃焼させた。本書は生きていることのすばらしさ、生かされていることの有り難さに対する、いわば証(あかし)の書である。

ここまで進んだ医学であるが、白血病の原因はまだわからないのだという。従って、誰でも白血病に罹る可能性を持っている。患者には抗がん剤の注射がうたれ、その結果、たいていの人は頭髮が抜け落ちる。正子さんも例外ではなかった。しかし彼女は「とうとう禿ます会の会員になってしまった。これ見て、ツルツルよ」と、あっけらかんに、禿頭を見舞いの友人たちに見せたという。彼女のこの明るさは、病院中の評判となり、多くの同病の人々をなぐさめ、家族も逆に励まされたのだった。彼女はこの病気を通して、精神的に大きく成長していった。この頃の母と娘の間でかわされた夜の挨拶は「正子ちゃん お休み、今日一日最高にしあわせ、一しよに暮らせたもんね。」「お母ちゃんお休み、正子も幸せ、

明日も又最高の日が訪れますように」であった。そして、正子さんの最後の言葉は「少し疲れたみたい、もう眠っていいかしら」だった。

遺体は、正子さんの意志に従って献体さ

れた。本書はご両親によって書かれた鎮魂の書である。これを読む人は、魂が揺さぶられる経験をするであろう。

北垣宗治(大学文学部教授)

同志社新島記念講堂(礼拝堂) 工事概要

位置	京都府綴喜郡田辺町字多々羅小字都谷一四
用途	講堂・礼拝堂(一、〇二三人収容) 小礼拝室兼会議室、瞑想室、事務室
構造	鉄筋コンクリート造、一部鉄骨造、三階建(塔部分六層)
面積	建築面積 一、九八四・一六㎡ 床面積 一、八九八・〇三㎡
高さ	延べ面積 二階 五四二・九一㎡ 最高高さ 四五〇・八二㎡ 最高軒高 二、八九一・七六㎡ 階の高さ 四〇・〇〇m 三〇・〇〇m 四・六五m 四・二〇m 七・一〇m
工事総額	一億円